

フランス語圏教授法スタージュについて —BELC、CLA、CAVILAM、およびケベック

明石 伸子

AKASHI Nobuko
Université Waseda
amakashi@mxv.mesh.ne.jp

はじめに

日本の大学教育において、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組」、すなわち FD (Faculty Development) が声高に唱えられるようになってからすでにひさしい。大学審議会が答申として「21 世紀の大学像と今後の改革方策について」をまとめたのは平成 10 年のことである。これを受けて平成 11 年からは、大学設置基準の一部として明確に FD の努力義務が規定された。以来、FD を実施する大学の数は、年を追うごとに伸びてきている。

「大学教員のファカルティディベロップメントについて」と題された文部科学省のサイトを参考にすると¹⁾、学部におけるファカルティ・ディベロップメントの内容について、a. 新任教員のための研修、b. 新任教員研修以外の教員のための研修会、c. 教員相互の授業参観、d. 教員相互による授業評価、e. 教育方法改善のための講演会の開催、f. 教育方法改善のための授業検討会の開催、g. 授業方法改善のためのセンター等の設置、h..g 以外の学内組織等の項目を規定していることがわかる。しかし、学生の授業評価アンケート以外で、大学ベースによる FD 活動として、フランス語教員の大部分が関係するような取り組みは、ほとんど耳にされることはない。

大学で教えるのに教員免許が必要ないのは周知の事実である。そのため教員になる前に教科教育法を学んでいる教員は少ない。またフランス語の教員免許のニーズが乏しい現実から、フランス語教員のための教職課程が充実しているとはいえず、履修したとしても専門的な知識が豊富な指導者と学べるとは限らない、また教育実習がフランス語で行えないなどの問題が山積みであることなども指摘されている²⁾。いずれにせよ、教授法について知識がなくても教え始められるという環境に乗じて、自らの学習指導のクオリティーについて省みないのは、教員として許されるべき姿勢ではないといえよう。

フランス語教育においては、しばしば短期間にゼロからひと通りの基礎を教え込

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

むことを要求される。また、世界全体で国際化社会が叫ばれる時代になって、従来の文法中心の外国語教育とは異なる、コミュニケーション型な授業を担当する機会も多くなっている。そうした条件に応じるためには、教授法の理論とテクニックが極めて効果的なのである。

このような状況に対して改善をもたらすため、学会や関係機関によって行われてきたのが、フランス語教員研修である。日本フランス語フランス文学会 (SJLLF) ・日本フランス語教育学会 (SJDF) ・フランス大使館の3団体による共催のフランス語教育国内スタージュは、2006年からはすでに5回ほど実施されている。毎年十数名のスタージュ生が3月末に東京日仏学院³⁾で集い、4~5日間の講習(カリキュラムは、教授法の歴史、ヨーロッパ共通参照枠、教材分析、発音、文法、講読、チーム・ティーチング、模擬授業等。具体的な講座名については両学会のサイトを参照のこと⁴⁾)を受ける。そして参加者の中から、フランスで行われる海外教員研修に出発するスタージュ生が決定される。派遣人数は年度により変遷してきたが、昨年度は6名が8月に2週間の研修に参加した。

ちなみに、日本のフランス語教育の歴史においては、SJLLF・フランス大使館・文部(科学)省により1963年から2003年まで40年の長きにわたり実施されていた国内スタージュの功績も忘れてはならないであろう。このいわゆる旧スタージュについては、1988年にSJLLFが刊行した『学会25年の歩み』(フランス語フランス文学研究別冊)がp.52~p.58にかけて、1987年までの活動内容をつぶさに報告している。また、それ以降の経緯、つまり文部科学省の離脱などにより旧スタージュが終焉する2003年にかけての情報を得るには、学会ニュースのスタージュ報告欄が詳しい。

従来、フランス研修は上記のように、国内教育スタージュでの選抜を経て、授業料や滞在費の援助を受けながら参加するのが常であった。しかし、このような研修を受けたスタージュ生のなかには、フランス語圏で受講した研修の経験の貴重さと効果を実感して、自費であっても参加を繰り返したいと感想を述べる参加者が現れ始めている。確かに、多くのフランス研修は、個人で参加する者にも門戸を閉じてはいない。しかしながら、思い切ってそれらに自らのイニシアティブによって参加する日本人教員は多いとはいえないだろう。問題なのは情報不足である。教授法に関連する研修を提供する施設は複数あり、もたらされるカリキュラムの内容は同一とはいえない。参加する価値があると思われ、なにより自分自身にふさわしいスタージュを選ぶことが大切である。

そこで本アトリエでは、夏期に実施される海外スタージュに関する情報を集め、それらを提供することを試みた。タイトルをフランス・スタージュとしなかったのは、SJDFが窓口として応募者を集めるケベック・スタージュにも触れる機会を持ったからである。今回取りあげたフランス・スタージュとの相違点は、ケベック・スタージュの場合、州政府の募集に応募したものしか受講できないことである。しかし、このスタージュは3週間にわたり、教授法の基礎を分野別にしっかりと講義し、またフランス語がヨーロッパだけで母国語として用いられる言語ではなく、別の大陸でも話されている言語であることを現地体験させ、フランス語を守り抜いた土地の豊かな文化についても見聞を広めてくれるので、その存在をさらに周知される必要があるため、フランス研修と共に紹介を試みた。

フランス語研修期間の格づけシステム : Le Label Qualité Français Langue Étrangère

先に述べた SJLLF の『学会の歩み』には、1963 年から 1987 年までフスタジエールが参加したフランス・スタージュとして、派遣順に Pau、Sèvres、Grenoble、Nice、Menton、Montpellier、Besançon、Poitiers、Tours、Paris、Tours、Avignon、Aix-en-Provence、Vichy が並んでいる。日本の教員は実に様々な研修機関へと出向いたことになる。しかし、現在の新スタージュが実施されてから送り出された研修先は、主に CLA (Besançon)、CAVILAM (Vichy)、BELC (Nantes) である⁵⁾。

これら 3 つの研修期間は、Le Label Qualité Français Langue Étrangère で、最も高い評価を得ている。FLE に関連した語学学校に関するこのシステムは、まだ日本ではあまり知られていないので説明を加えたい。フランスには毎年 10 万人以上がフランス語を学びにやってきており、それを迎え入れる語学学校は 300 校以上にのぼる。そこで *Ministères de l'Enseignement supérieur et de la Recherche*、*Ministères des Affaires étrangères et européennes*、*Ministères de la Culture et de la Communication* は CIEP (Centre international d'études pédagogiques) に、それらの語学学校のクオリティーに応じた labellisation (ラベルづけ) 作業を委託したのである。2007 年から現在に至るまで、82 のセンターがそのクオリティーに応じて étoile (三ツ星まで) を与えられている。語学学校の適正な評価のためには、5 つの参照点 (すなわち、教員、養成および教育の内容、受け入れ態勢、環境および設備や安全性、経営) が設定され、その下位にはさらに合計で 109 の確認項目が細分化されている。ちなみにラベルの有効期間は 4 年間である。したがって以下では、どの点においても優れた評価を獲得した 3 つのフランスの派遣先について言及する。

CLA (Centre de linguistique appliquée) -Besançon -

1958 年に創立されたこのセンターは、年間を通して 3000 人の語学研修生を受け入れるフランス屈指の教育機関である。夏期フランス語教員研修は *Stages pour professeurs de FLE-été* と名づけられ、7 月と 8 月を前後期の 2 週間に分けてコース設定しているが、それらをつなげて 1 ヶ月の受講も可能である。毎日、8h30-10h00、10h30-12h00、13h30-15h00 のモジュールのほか、フォーラム・ワークショップ・講演会も催され、1 日 6 時間半の研修に参加できる。<http://cla.univ-fcomte.fr/>

CAVILAM (Centre d'Approches Vivantes des Langues et des Médias) - Vichy -

1964 年に生まれた非営利団体で、温泉保養地ヴィシーの街と一体となり、開設から述べ 12 万人以上の研修生を迎え入れている。TV5MONDE、RFI、CANAL ACADEMIE とパートナー・シップを結ぶなど、とりわけ先進的な取り組みで知られている。*Stages intensifs pour professeurs de français : parcours thématiques et pédagogiques* と題された夏期フランス語教員研修は、1 週間・2 週間・4 週間単位で受講可能である。午前中 2 コマ、午後 1 コマの授業があり、午後には文化活動や地域活動が行われるほか、夜には映画やスペクタクルなどの鑑賞、ダンス・パーティーが催される。<http://www.cavilam.com/>

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

BELC (Bureau d'enseignement de la langue et de la civilisation françaises à l'étranger) - Nantes -

この教育機関は1959年にBEL (Bureau d'études et de liaison pour l'enseignement du français dans le monde) という名の下に誕生したあと、やがて外国語としてのフランス語教育を中心的に取り仕切るCIEPに併合され、BELCとなって生まれ変わった。研修の歴史は1960年に始まる。研修地はストラスブール大学、カーン大学、ナント大学等と移り変わってきた。フランス政府の給費を受けた教員のほか、世界各国のInstitut やアリアンス・フランセーズの責任者、そしてフランス大使館の書記官なども受講する。セッションは7月の前半・後半の2週間あるいはふたつのセッションをつなげた1ヶ月単位である。夏期研修に用意されるのは15時間分の授業を行うモジュールの数は100を超える。<http://www.ciep.fr/belc/index.php>

以上、この発表でとりあげたフランス研修についてさらにつけ加えたいのは、各講習で正規の単位を消化すれば、それぞれフランシュ・コンテ大学 (Besançon)、ブレーズ・パスカル大学 (Clermont-Ferrand)、ナント大学が発行する修了証明書を受け取れること、また研修と同時にDALFの受験ができたり、FLEのマスターを取得するためのコースが備えられている研修もある等の有益な情報である。これらの研修に自費で参加する場合は、授業料も大きな関心事となるはずだが、試算したところ各研修間での相違はあまりなく、授業料と滞在費を合わせて2週間だと10万円前後、また1ヶ月で15~17万円前後と見積もればよいことがわかった。

Stage de QUÉBEC -Montréal-

Langue, culture et société québécoise という副題を与えられたこの研修は、ケベック州政府のMinistère des Relations internationales およびMinistère de l'Immigration et des Communautés culturelles の管轄により、モントリオール大学とパートナーシップを結んで実施されている。もとはラテン・アメリカのフランス語教員の研修として構想されたが、それがアジア・オセアニア圏の教員まで迎え入れるようになった。同時に英語圏のカナダ人フランス語教員の研修としての機能も果たしている。研修の目的は、外国語としてのフランス語の教授法へのイニシエーションといえよう。上記のフランス研修がモジュール制で、好きな科目を組み合わせるカリキュラムを自己設定するのに対し、ケベック・スタージュは、3週間分の午前中いっぱい費やして、教授法の基礎的知識を建設的に吸収して行く。その分野は学習ストラテジー・語彙・講読・リスニング・発音・共同学習・評価など多岐にわたり、理論説明を聞いたあとグループ・ディスカッションを繰り返して、現実的な問題解決の方法を探る試みが行われるのである。午後には、ケベックの文化(歴史・文学・映画・音楽等)を知るための講座が用意され、施設見学やエクスカージョン(モントリオール市内の探索のほか、ケベック・シティの訪問)も行われる。

おわりに

今回の発表にあたり下記に参考文献として記す多くの研修報告書に目を通した。研修を体験した教員の実感が表れるのは、やはり末尾に添えるまとめである。繰り返し現れる主な感想を挙げてみよう。まず、フランス語教員研修が学習指導するう

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2011

えで有意義な教授法の理論とテクニックの蓄積に触れる貴重な機会となったこと、そして海外研修で得たそれらの知識が日本のフランス語教育のなかで、そのまますぐに生かされるかどうかは定かでないにせよ、そこにはフランス語を教えるためのヒントが溢れていること、またフランス語という言語を教える仲間が世界中にいることに気づかされたこと、さらに研修を受けることによりひさかたぶりに学習者の立場に戻れたという新鮮な感覚を取り戻した等である。自分の職場だけに閉じこもるだけでは、時代に対応した効果的な教え方は身につかない。最も自分が必要とするタイプの研修機関あるいは授業内容を見つけるためには、これらの報告書を読むのが効果的だろう。今後は給費の有無に関わらず、日本のフランス語教員が積極的に海外フランス語教員研修に参加し、フランス語の教育技術に研鑽を積まれることを念じてやまない。

注)

- 1) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/06102415/004.htm
- 2) 菊地歌子／川勝直子, フランス語教師のための研修の必要性
外国語教育研究 第14号, 2007, pp.75-96
- 3) 初年度のみ日仏会館で行われた。
- 4) 日本フランス語フランス文学会 : <http://www.soc.nii.ac.jp/sjllf/>
日本フランス語教育学会 : <http://sjdf.org/>
- 5) 他には Institut de Touraine (Tours) のみ。

参考文献 :

- ※ SJDF(Enseignement du français au Japon / Revue Japonaise de didactique du français)
PEKA (Etudes didactiques du FLE au Japon)
- CLA** : 安藤 2007 PEKA, 2006 年度夏期フランス・スタージュ参加者友の会 2006 夏期フランス・スタージュ報告書(SJLLF&SJDF 刊行小冊子), 宝田 2006 PEKA, 三浦 2005 PEKA, 本間 2003 PEKA, 磯村 1994 PEKA, 水野 1992 PEKA,
- BELC** : 西川 2005 PEKA, 明石 2004 SJDF, 山下 2000 九州女子大学紀要, 高階 2000 大阪外語大学, 山崎 1998 PEKA, 片山 1998 PEKA, 姫田 1997 PEKA, 根岸 1995 PEKA, 相田 1995 PEKA, Georgette KAWAI 1990 SJDF, 西永 1974 SJDF
- CAVILAM** : 深川 2009 PEKA, 一條・尾崎・前田・松尾 2009 PEKA, Dominique PESCHAR・左合 1993 PEKA, 善本 1991 PEKA
- QUEBEC** : 櫻木・鷹觜・太治 2009 Rencores Pédagogiques du Kansai, 立川 2009 SJDF 西・小松祐子 2005 SJDF, 尾崎 2004 SJDF, 中村 2002 PEKA, 鶴田・福崎・室井 2001 SJDF, 筑紫 1989-1990 SJDF, 向井 1988-1989 SJDF, 朝倉 1987-1988 SJDF
- そのほか** (フランス語圏研修) : 石丸 Institut de Touraine(Tours) 2009 PEKA, 西山 CREDIF 1996 明治大学大学院文学研究論集, 鳥居 Montpellier 1995 PEKA, 土屋 Montpellier 1995 PEKA, 野池 Paris(FPI) 1990 PEKA, 佐原 Sant Etienne, 1991 PEKA